

山村庄亮先生を偲んで

筑波大学
茨城大学
前橋工科大学

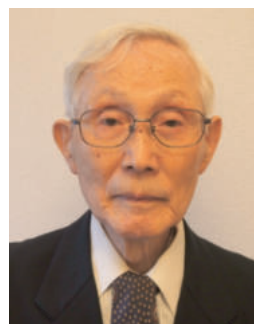
繁森英幸・戸嶋浩明・中村建介

慶應義塾大学名誉教授 山村庄亮先生が突然ご逝去されました。天然物化学と学生をこよなく愛された先生を偲んで、慶大で初めて指導された卒業生による追悼文を集めました。執筆の希望はもっと多かったのですが、誌面の都合上それらの一部のみを掲載させていただきました。

山村庄亮先生との出会いは1981年に設置された慶應義塾大学理工学部(III系：化学科または応用化学科へ進学)の第1期生として入学したときにさかのぼる。記憶が確かならば2年生の授業「生体物質の化学」を受講し、白髪に作業服上着姿(当時、48歳)で熱く語り速記レベルで板書するバイタリティーあふれる姿に圧倒されつつも魅かれるものがあり、その後3年生の化学科の専門科目を通じて天然物化学の分野に進みたいと思うようになっていた。4年生で希望どおり天然物化学研究室(山村研)の第1期生となり、その後の博士課程まで6年間の研究室での濃密な生活が始まった。私は合成の研究を希望していたため西山繁先生に直接のご指導をいただいた。

私を含めて数人は東京方面から電車通学をしており、23時21分発の東横線に間に合うよう帰途に就くことが日常的にあった。時には先生も一緒に日吉駅に向かうことがあったが、先生は話をしながら鰻谷(矢上キャンパスと日吉キャンパスの間の谷)を駆け下り駆け上がるかのごとく圧倒的に20歳代の我々より速かった。電車に間に合うのはよいが歩調を合わせる我々は息が上がっていた。先生のバイタリティーあふれるエピソードの1つである。

先生の一貫した興味、研究哲学は「生物現象を化学で解き明かす」ということであつたと思う。卒論テーマは当時オジギソウの運動に関わる物質として報告されていた「没食子酸のフェノールグルコシド誘導体」の合成研究であつた。いくつかの誘導体の合成に成功し、その中の1つがネムノキの就眠運動を阻害することがわかった。



故山村庄亮先生

このときに味わった「生物現象を化学で解き明かす」の一端を垣間見たワクワク感とその後のこのテーマの展開への期待感は今でも忘れることができない。

山村先生は抗腫瘍活性物質にも着目されており、修士課程と博士課程ではそれぞれ別の合成研究のテーマをいただいた。修士課程では黄変米の原因となるマイコトキシンである aurovertin B(抗腫瘍活性物質、ATP 合成酵素阻害剤)の合成を達成し、博士課程では aplysiatoxin/oscillatoxin 類(抗腫瘍活性物質、発がんプロモーター、プロテインキナーゼC活性化剤)の合成研究を行い、天然物でないが 3-deoxyde bromoaplysiatoxin の合成を達成した。これらの関連化合物のその後の研究展開は、現在も複数の研究者により行われており、「生物現象を化学で解き明かす」ための化学合成の重要性をご教授いただいた。

日常的に研究室を巡回し「おい、どうじゃ?」という一声で不意に始まる報告・ディスカッションは時に長引くこともあり、そんなときは予定が狂うなと思ったこともあったように思うが、できるだけ良い報告をしようという研究生活の励みになっていたのも事実であり、今となっては話し好きな先生との良い思い出となっている。

博士課程修了後も田辺製薬株式会社(当時)への就職、北海道大学農学部への転職とお世話になりっぱなしであった。北大では博士課程の研究を展開し推定生合成経路

に基づく oscillatoxin D および 30-methyl oscillatoxin D の全合成を達成したときは大変喜んでいただいた。茨城大学へ赴任後も様々な助言をいただき、先生のこれまでの温かいご指導に感謝いたします。安らかに眠り下さい。(戸嶋浩明)

恩師、山村庄亮先生を一言で表現するとすれば、本当に「純粋な」先生でした。1981年に慶應義塾大学の理工学部に入學し、何となく毎日を過ごしていた日吉キャンパスでの2年間で、一番インパクトのあった講義が先生の「生物物質の化学」でした。黒板に-OHと-OMeの判別も難しい走り書きで、複雑な構造式と謎の矢印をものすごい勢いで描きながら、黒板の右端に辿り着くと一気に全部消してしまい、板書しきれなかった学生から悲鳴が上がると、「僕が習った平田義正先生は、右手のチョークで構造式を描きながら、左手に黒板消しを持って消していたよ」と笑いながら話されるのでした。また、5限終業のチャイムが午後6時に鳴ってから20分30分と時間が経ち学生たちがそわそわし始めても「君たち授業料を得したと思えばいいから」と平然と講義を続けられる姿に、皆すこし呆れながらも、化学に対する純粋な姿勢と、それを伝えたいという気持ちに圧倒されて、席を立つ学生は1人もいなかったと記憶しています。

研究室に配属されてから修士修了までの3年間は文字どおり朝から晩まで実験漬けの毎日でした。終電を逃がすと、教授室のソファベッドで仮眠してもよいことになっており、翌朝寝過ごしているところに出動してこられて、夜遅くまで実験を頑張っていたのだと思われてか、ニコニコと「もう少し寝とっていいよ」とおっしゃっていただいたこともありました。また当時、慶應の野球部が強く、優勝のかかった平日の試合を皆で応援に行こうということにな

り、畏友の山口修君が代表して教授室にお願いに上がったところ、「体育会の応援も結構だが、君たち自身がケミストリーのフィールドに立ちなさい」とたしなめられたこともありました。

先生は筆者の理屈っぽい性格と計算機好きなどところを見抜かれて、修士論文の理論的解釈のために分子力場計算を取り入れるなど、計算機科学の世界へと導いて下さいました。また、アメリカ留学後も定職に就けない筆者を心配して、多くの先生方に声を掛けていただいていたとも伺いました。前述の山口君とはこの30年間あまり、毎年元日に年始のご挨拶に上がっていましたが、いつも卒業生のことを気に掛け、苦勞している卒業生の心配や、また、あるときは製薬会社に就職した卒業生が新薬の開発に貢献したことを誇らしげに話されました。定年退職後は近隣の小学生の科学教室の活動にも尽力され、指導した子供さんたちが、その後有名大学の理系学部合格したことなども嬉しそうにお話し下さいました。科学に対する強い思い、とりわけ、科学を志す若者に対する眼差しの優しさと純粋さで先生に並ぶ方を筆者はほかに知りません。

今年の2月に、久しぶりに学生時代の数人の仲間と先生を囲んでお話をする機会がありました。筆者が本年4月に学長に選任された経緯をご報告させていただいたのですが、そのとき同席されていた鈴木啓介先生から「あの後、先生が心配されていたよ」と、先生のご葬儀のときに聞かされ涙がこぼれました。内向的な筆者の性格を気遣ったのかと思います。本稿の執筆に際し、最後まで先生にご心配を掛け通しだった不肖の弟子では僭越かと思いましたが、先生のお人柄を偲び、思い出を共有させていただければと考え直し、ペンを執らせていただきました。

山村庄亮先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。(中村建介)



としま・ひろあき
茨城大学地球・地域環境
共創機構 (GLEC) 機構
長



なかむら・けんすけ
前橋工科大学 学長



しげもり・ひでゆき
筑波大学生命環境系 教授

私が初めて山村庄亮先生にお会いしたのは、慶應義塾大学理工学部1年次後期の「化学」の講義でした。大教室で先生がロール式 OHP に化学構造式を描かれては次々と巻いてしまわれるので、必死に書き写したことを覚えています。その講義で先生が「こんな小さな有機化合物が私たちの生命と密接に関わっている」と話されたとき、私は目から鱗が落ちるような衝撃を受けました。そこで2年次早々、意を決して先生の教授室を訪ねました。午前中に伺いましたが話は尽きず、お帰りの時間まで研究の話をお聞かせいただきました。一学生にこれほど熱心に向き合って下さったことに感銘を受け、翌日から研究室で実験を手伝わせていただくこととなりました。

最初に取り組んだ有機電解酸化反応は、平面分子が立体的に変化する画期的な反応で強い感動を覚えました。まだ有機化学も十分理解していない私に、先生は反応条件から分離精製法まで懇切丁寧にご指導下さり、これが「天然物化学」に進む私の原点となりました。3年次からはマイコトキシンの全合成に携わりました。山村研究室では1人1テーマで、先生は常に「自分の研究はほかの誰よりも知っていなければならない。自らが最先端であることを自覚なさい」とおっしゃっていました。その言葉に奮起し、天然有機化合物討論会直前まで粘って形式的全合成を完成させたことは忘れ得ぬ思い出です。

博士課程では「植物の就眠運動の解明」に取り組み、就眠運動に関わる物質の単離・構造決定、全合成および作用機構の解明を達成することができました。先生のライフワークにわずかながらも貢献できたのではないかと感じています。その後も先生のご紹介により北海道大学、筑波大学で「天然物化学」を続けることができ、特に筑

波大では植物の生命現象の化学的解明を進める中で、先生から多くの貴重なご助言を頂戴いたしました。学会等でお会いするたびに「どうじゃ」と声を掛けて下さり、それを励みにこれまで頑張ってきたように思います。

山村先生はチャールズ・ダーウィンを深く敬愛され、折に触れてその話をして下さいました。ダーウィンが観察した植物の就眠運動を化学的に解明されたことを、今頃向こうの世界で語り合っておられるかもしれません。ご退職後は子供たちに科学実験を教えられ、毎回新しいテーマを考案されて30種類もの実験を創られたと伺っています。「理科離れ」を憂えておられましたが、自らの手で理科に興味を持つ子供たちを育てられたのだと思います。さらに「不斉の起源」にも取り組まれ、その進捗をお聞きするのが楽しみでした。お亡くなりになる数ヵ月前にも電話で長時間語り合ったことが最後のやり取りとなりましたが、今なお「どうじゃ」と気に掛けて下さっているように思えてなりません。ダーウィンが述べていた、純粋に化学を愛し好奇心を持ち続けておられたのは、まさに山村先生でした。

卒業時にいただいた「墓石に名を刻むより、全世界の図書館に名を刻め」というお言葉は、今も胸に刻まれています。現代ではSNSを通じて容易に世界に発信できますが、確かな証として学術的成果を世に残し、名を刻むことこそが先生の遺志であると感じています。その思いを受け継ぎ、これからも邁進したいと思います。

山村先生の温かな教えと情熱は、これからも私の人生を導き続けることでしょう。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(繁森英幸)

© 2025 The Chemical Society of Japan